

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4790100244		
法人名	医療法人 社団輔仁会		
事業所名	介護サービスセンター ゆいまーる松川 グループホーム		
所在地	那覇市松川301番地		
自己評価作成日	平成24年 10月 10日	評価結果市町村受理日	平成25年2月1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.jp/47/index.php?action=kouhyou_detail_2010_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=4790100244-00&amp;PrefCd=47&amp;VersionCd=022">http://www.kaijokensaku.jp/47/index.php?action=kouhyou_detail_2010_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=4790100244-00&amp;PrefCd=47&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 沖縄タイム・エージェント		
所在地	沖縄県那覇市曙2丁目10-25 1F		
訪問調査日	平成24年11月15日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> <li>・広い空間や、長い廊下を利用した歩行訓練を、日常的に、楽しく行えるような様々な工夫を凝らしている。</li> <li>・閉じこもりがないよう、居室へのテレビと、ポータブルトイレの設置を控え、共有のスペースで過ごして頂けるよう、また他者との交流が持てるような支援を行っている。</li> <li>・睡眠薬に頼らず、生活のリズムを整えられる事で、夜間の良眠へつながるよう支援を行っている。</li> <li>・Wish Dayを届け、思いや、希望を聞き、叶える取り組みを行っている。</li> </ul>
---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>法人全体として地域交流に力を入れており、年2回の清掃活動参加や地域の祭りに入居者と職員が参加している。又、地域の公民館で「夏休み三代交流イベント」地域の方、保育園児、学童の子供たちも参加し石臼を使用して、豆腐づくり体験を行っている。入居者一人ひとりの思いや願いを聴く「Wish Day」を継続し、、事業所理念「心、精神、思い、力」を尽くすを基本として、出身地の離島へ帰郷のお手伝い等入居者の思いを実現している。足腰の筋力低下を防止するため、週3回立位訓練や歩行訓練を実施している。又、洗濯物をたたんだり、食事の配膳や下膳、食器洗い等入居者本人が出来ることは積極的に参加できるよう取り組んでいる。職員の人材育成として、介護福祉士資格取得に向け、法人全体で実技試験の勉強会を開催し支援する等の取り組みを行っている。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新職へは、入職の際にオリエンテーションにて、時間をかけ理念について説明を行っている。ミーティングにおいても、理念に基づいた支援ができていのかどうかの話し合いをしている。	理念は、開設時地域密着型サービスの意義を踏まえ作成し事業所内に掲示している。職員は、毎月のミーティングの中で、「心を尽くす」とは何か話し合い常に理念に立ち戻り、入居者の思いや願いを大切に考え実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	・自治会へ加入し、掲示板が、施設敷地内に設置されている。・年2回の清掃や、祭りへの参加等、相互協力は常に行っている。・買い物地域を商店でしたり、保育園との定期的な交流を持っている。・定期的に行っている、ミニ喫茶へ地域の方を招待している。	地域の清掃活動に年2回職員が参加している。3カ月に1回地域の独り暮らしの方を招きミニ喫茶を行っている。事業所より月1回入居者と保育園児の交流を継続して実施している。自治会主催の行事を見学する機会はあるものの地域住民へ事業所や入居者の理解を深めるまでには至っていない。	法人全体での地域貢献に加え、事業所独自に地域住民の方への啓蒙活動を行うことに期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	・これまで同様、同法人内で月1回行っている、家族を対象とした勉強会のチラシの配布。 ・又、改まった勉強会等とは違う方法、例えば、外部からホームに来て頂き、直接入居者との交流を通し、認知症を理解してもらえるような取り組みも行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	・24年度より2カ月に1回開催。 評価への取り組み状況は、入居者の状況や、行事の報告を通して行っている。	運営推進会議は、入居者全員、家族、市担当者等が参加し、今年度より2カ月に1回定期的に開催している。入居者の状況や事業所の活動報告以外にヒヤリハットや事故報告も行っている。議事録は、事業所入口に掲示し欠席者や要望がある委員の方へ配布している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	・運営推進委員会に、那覇市の職員と、地域包括支援センターの職員も入ってもらっている。	運営推進会議に市担当や地域包括支援センター職員が参加し、事業所の現状報告や助言を頂く等の情報交換している。担当者からは、メールにて研修の案内やアンケートの協力依頼を受けている。運営推進会議の案内を入居者と一緒に届けている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	マニュアルを利用しながら、ミーティングにおいて、独自の勉強会をし、日々のケアの中で確認をしている。	事業所は「身体拘束をしない」を方針とし、職員は新人研修時や勉強会等を受け理解している。出入り口のエレベーターは、施錠せず自由に利用出来るようになっていて、一人でも外出される方には制止せず、一緒に散歩に出かけている。家族にもリスクについて説明をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	・月1回のミーティングにおいて、課題を決め勉強会をする際に、虐待防止法関連を課題とし勉強会を行っている。		

沖縄県(介護サービスセンターゆいまーる松川 グループホーム)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度の利用はないが、同法人内の相談センターとの連携はとっている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は、契約書、重要事項説明書を読みあげながら、各項目に対し十分な説明を行い、納得して頂いた上で契約を行っている。 解約時同様。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進委員会に参加してもらい、要望や意見を職員に限らず、委員にも聞いてもらい、第三者の意見も聴けるようようにしている。	入居者からは、日頃のケアの中で意見や要望を聞いている。家族からは、運営推進会議や面会時に聞く機会としている。家族から、「歩行訓練をやって欲しい。」との意見に週3日立位訓練、歩行訓練を実施する等支援に取り組んでいる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティングは、月一回の定例と、必要時に行う体制は変わらず、その中で出た意見や要望は、なるべく反映できるようにしている。	毎月のミーティングで、職員から意見を聞く機会としている。職員の休憩時間の取り方について意見が出され、勤務内容を検討し、休憩時間が取れるようになった。管理者は、職員一人ひとりに教育委員、防災委員等の担当を持たせ、職員のケアの向上に積極的に取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	自己評価や人事考課を毎年2回実施。 契約から正職への、処遇改善を事業計画に挙げ、やりがいをもって働けるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研修や、その他の研修へも参加できる機会の確保(勤務の調整)を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	事業所全体としての交流はしているが、グループホーム独自の交流会については、計画はあるも、諸事情により実施できていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	相談の申し込みがあれば、インテークに時間を掛け、何回かの自宅を訪問を経て、生活歴や要望を聞き出し、その上で、安心な生活ができる為の支援を検討している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	少なくとも2回以上の面談を行う。1度に全てを聞き出そうとせず、数回の面談によって困っている事や、要望を話して頂けるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	自宅への訪問の際や、見学を兼ねたホームでの相談の際は、いずれも、話しやすい雰囲気作りをする事で、ニーズが引き出せるよう努め、多角的視野でのサービスの必要を見極めるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食事は、入居者と職員と一緒に摂るようにしている。又、時には、一緒にベッドで添い寝をしたり、いつでも話の出来る距離を保てるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族構成を把握し、入居者のみの把握にとどまらず、時には子育ての事や、趣味の事など、共通の話題で雑談をしたりして身近に感じて頂けるようにしている。又行事の際には参加はもとより、準備も家族にも手伝ってもらったりしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	日ごろから、友人や近所の方が、気軽に訪ねてくれる雰囲気作りを心掛けている。又、家族の話や、生活歴からリサーチした情報をもとに、昔なじみの方に訪問して頂いたり、会いにいけるような支援を行っている。	入居者や家族、訪問に来られた地域の方から、馴染みの人や場所の把握を行っている。「出身地の離島に行かせたい」と家族の希望もあり、家族と職員3名が付き添い1泊2日の里帰りを行う等、馴染みの関係継続の支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	居室にはテレビを置かず、部屋にこもる事がないような支援を行っている。又、利用者間にも配慮し、かつ偏りのないよう、テーブルやソファの配置換えも行っている。		

沖縄県(介護サービスセンターゆいまーる松川 グループホーム)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去後のサービス利用がスムーズにいくような支援を行っている。又、時々電話を掛けフォローの体制を継続している事のアピールはしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の暮らしの中で表出する感情や、言葉から、希望や意向の把握ができるよう努めている。Wish Dayの実施も引き続き行っている。	日頃のケアの中で、入居者から直接聞いたり、面会時家族から収集している。把握が困難な場合は、入居者の表情や態度から汲み取り、職員で話し合い情報共有している。孫の結婚式に出席しスピーチを行った事例もある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居年数の長い方がほとんどで、入居してから現在までにかけて、これまでの暮らしの把握はできていて、不穏時には、その情報をもとに対話を行う事で、安心に繋がる事がある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	基本的には、それぞれのペースで過ごして頂いている。心身状態の把握は、記録や申し送りで把握している。有する力については、アセスメント時に、出来るような事や可能性を探るようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	3人をチームとし、アセスメントから計画書作成までを行っている。	モニタリングは2か月に1回行い、担当者会議は、3か月に1回入居者や家族、担当職員も参加し意向を確認、介護計画を作成している。介護計画の内容は、申し送り等で情報共有しているが、ケアカンファレンスで話し合い実践している内容が、介護計画に反映されていない。	ケアカンファレンスで話し合い、変更している内容を介護計画に反映出来る仕組み作りに期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	生活の様子は、個別に午前、午後、夜間と記録をし、気付いた事に関しては、申し送り表に記録している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入院加療者に対しては、退院後の受け入れに対し、即退所とはせずに、柔軟な対応の検討を行うようにしている。		

沖縄県(介護サービスセンターゆいまーる松川 グループホーム)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	訪問での散髪等、主にインフォーマルの活用をしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者9名が、同敷地内にあるクリニックの医師を主治医とし、定期健診や定期健康診断、緊急時の対応をしてもらっている。受診の際はバイタルのデータや変化についての報告を、口頭、又は紙面にて行い、常に連携を取りながら、入居者の健康管理を一緒に行っている。	入居者及び家族の意向を踏まえて全員同法人クリニックの医師がかかりつけ医となっている。クリニック受診及び他科受診については原則家族が対応している。入居者の情報を口頭及び文書でかかりつけ医に報告しているが、医療的な助言を求めたい場合は職員が一緒につき添うこともある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護の配置はないが、緊急時には他部署の看護師が対応できるように、日ごろより情報の提供をし連携が取れる体制作りをしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院中も、馴染みの関係が維持できるよう、まめに面会を行うようにしている。必要ならば、食事の介助のお手伝いも行う。退院時のカンファレンスも家族と出席している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の対応はないが、身寄りのない方に関しては、今後は柔軟な対応を検討している。	現在のところ看取りの対象となる入居者はいない。法人全体の方針はまだ明確に示されていないが、本人及び家族が希望する場合はホーム内での看取りについてかかりつけ医の意見を踏まえて職員全員で検討することとしている。家族とはホームで出来ることとできないことについて事前に確認している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	消防署による救急救命の研修を、定期的に行っている。又、緊急時の対応も抜かりがないよう、手順等を貼り出し、いつでも確認できるようにしたり、その訓練は毎月行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	昼夜それぞれを想定しての訓練を、消防署の立会のもと、年2回行っている。	年2回消防署立会いのもと昼夜を想定した避難訓練を実施している。実際に入居者を3階から1階へ搬送して避難までにかかった時間を測定している。消火器・スプリンクラー・緊急通報装置等の設備は整備されている。災害時における備蓄等は確保していない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	なれ合いの中から出てくる言葉使いに対しては、職員各自が、意識する事で対応している。常に人生の大先輩である事を忘れないように心がける事を、管理者が注意を、喚起している。	職員は入居者の希望をかなえていく「Wish day」での個別の関わりを通して入居者自身の生活歴や家族歴を把握している。これまで戦禍を乗り越えてきた入居者の歴史を知ることによって1人ひとりを尊重した言葉で語りかけている。管理者はいつもこのことを繰り返し職員へ伝えている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常の会話から、希望や思いを聞き出せるような対話を意識して行っている。又個別での対話からは、普段聞けないような希望を聞き出せることもあり、主に個別での外出では特に意識して話すようにしている。基本的には生活の全てが自己決定できるような支援を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活全般を、その人の主体性や、自主性によって決定できるような支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着替える事で、生活にメリハリができるようまめな支援を行っている。又、それぞれの好み等の把握はできているので、それを基本とし支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備は入居者と一緒に行っている。又、土曜日と日曜日の2日間は、バイキング方式にする事により、食事を楽しめるような試みも行っている。	平日は3食とも法人施設からの配食を受けている。土・日にはホーム内で1品独自で調理したものを追加してバイキング方式の食事を採り入れている。職員と入居者が一緒に食卓に座りゆったりとしたペースで食べている。食後は自分でお膳を台所まで運ぶ様子が見られた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量、水分摂取量のチェックを毎回行っている。 水分の補給に関しては、心身状態に深く係わる事もあるので、嚥下状態の悪い方はゼリー状にするなどして、1日1.5リットル以上の補給ができるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行っている。義歯は洗浄剤に付けるよう促している。又、口腔状態の変化等は、その都度家族に報告し、歯科受診をすすめたりして、食事の摂取量に影響しないよう支援している。		

沖縄県(介護サービスセンターゆいまーる松川 グループホーム)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック用のボードを各トイレに設置、チェック用紙へのチェックも行い、排泄のパターンを把握した上で、定期的な声掛けを行ったり、日中は綿の下着の着用を勧めている。ポータブルトイレは使用せず、トイレへの誘導を行うようにしている。	一人一人の排泄パターンを排泄チェック表で把握している。昼夜ともオムツを使用している方もいるが、日中は全員トイレでの排泄を促して自立へ向けた支援に取り組んでいる。夜間は居室にポータブルトイレを置かずトイレまで誘導している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎夕食後に、寒天ゼリーの提供をしている。日中はなるべく動いてもらえるように、1日2回の体操と、全体、個別での歩行訓練や、屋内、外の散歩を行っている。便秘により食欲が減退にならないよう、便秘薬を用いる事もある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の支援は毎日行っていて、本人が入りたい時に入れるようにしている。	入浴は毎日行っている。全ての入居者に週3~4回は入浴してもらうよう働きかけている。拒否する方も見られるが、時間をずらしたりして対応している。入居者全員が女性であり、男性職員が介助する際には予め本人の了解を得てから支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	起床や就寝の時間は、それぞれの生活習慣によって異なるので、その人に合わせた支援をしている。休息は食事の時間にかちあった場合でも、食事時間を遅らせたりして対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局からの説明書を保管している。入居者各々に担当職員をつけ、薬のセッティングを行い、3か月ごとに担当を変える事で、職員全体での入居者の服薬についての把握ができるようにしている。服薬の変化は、申し送りやミーティングで周知できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	好きな事を行う事への制限はほとんどせず、それが夜のドライブであっても対応している。生活歴を考慮した支援としては、主に手作業の際に行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	最低でも週1回のドライブと、外気に触れる機会を作る目的で、施設内の花壇の水撒きを、職員と一緒にしたり、生まれ育った地域へのドライブも行っている。	個別の外出については、「Wish day」等の取り組みの際に本人が希望する場所に出かけている。週1回程度商店への買い物やドライブ等外出しているが、ホーム自体が3階に立地しているため日常的に近隣を散歩する等外出する機会は少ない。	

沖縄県(介護サービスセンターゆいまーる松川 グループホーム)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭面は基本的には家族管理でお願いしている。現金の所持している方が買い物をしたりした際は、レシートを預かる等して、トラブルのないよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は自由に使えるような場所に設置し、いつでも掛けられるようにしている。遠方の方には、手紙やはがきを書いてもらい、一緒に投函まで行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	全体的に過ごしやすいように配慮はしている。季節が感じられるように、ホーム内を時期に合わせて飾るようにしている。	共有空間にはソファと食卓があり日常的に入居者同士の交流の場となっている。フロアの照明は高齢者に配慮し明るすぎないものを取り入れ、壁には季節毎に飾り付けをしている。安全に移動できるよう食堂・トイレ・浴室等のづくりが高齢者に配慮された設計となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビング内には4台のソファを置き、寛げるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は広めにとっていて、お子さん家族が数人で来られても大丈夫のようにしている。家族の写真を飾ったり、自宅で使用していた家具を持ち込んだり、お線香をたかない条件での仏壇を持ち込んだり、居心地良く暮らせるようにして頂いている。	居室内の空間が広く家族も宿泊できるよう配慮されている。仏壇、タンス、生け花等これまで本人が大切にしていた物や馴染みの物が持ち込まれている。また居室内には、家族の写真を多く飾っている利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	全体がバリアフリーになっていて、居室までの通路はくまなく手摺りを設置、一人でも居室へ行き来できるように配慮している。トイレもリビングに一つ、教室側に3つ設けている。		